

人生を拓く

21

向朝子さん (84) 東町1

朝子さんは、鳥取県出身の父幸次郎さん（昭和32年、58歳で没）、福島県出身の母イシさん（昭和62年87歳で没）の8人姉弟の上から2番目の二女として現旭川市東旭川桜岡で生まれました。1953（同28）年、山口県出身の千早さん（平成16年、78歳で没）と23歳で結婚して一男二女をもうけました。

千早さんは、1930（同4）年4歳の時、父利一さん（同29年、59歳で没）、母マツ子さん（同62年、80歳で没）とともに山口県から釧路・オクシベツ川流域に入植。上川管内土別への転居を経て、1941（同16）年、東川（西2号北20番地）に移り住みました。求めた地は「砂利を片付けるために片隅に積み上げた」というほど大石の石ころだらけだったそうです。

結婚の翌年、突然の脳梗塞（こうそく）で義父利一さんが亡くなりました。「しゅうとさんからは『なに商売を変えてもいいから、親、兄弟の面倒だけは見てくれよ』とよく言われてね」。

「多い時は家族13人もいて、毎日1升（1・8リットル）以上ご飯炊いてたよ」と向家はにぎやかな大所帯だったそうです。しかし1964（同39）年、長女育美さん（当時8歳）が脳腫瘍（しゅよう）で早逝し、二女みどりさんも1984（同57）年、交通事故で23歳



の若さで亡くしてしまいました。

「洗濯機を買うのも遅かった。弟2人が高校に通うのに朝6時に電車に乗るから、午前3時には起きてお弁当作りしたんだよ。よくやってたと思う」と振り返るように、わが子3人に授乳する間も惜しんで義弟のために弁当作りする毎日。悲しむ間もないほど忙しい日々でした。

早朝から夜遅くまで働き詰めが続いていた1985（同60）年、千早さんが突然脳内出血で倒れてしまいました。「田んぼ2枚から始めて、キャベツ、キュウリ、茄子、玉ねぎ、ミツバといったばい作った。お父さんが倒れて、その時思ったよ。お父さんに私の体を助けてもらった：ってね」。

朝子さんは、以来20年間、自宅療養の介護を続けました。まったく動けなかった千早さんは車椅子で外出できるまでに回復し、懐かしがってよく旧自宅まで約4キロを散歩に出かけたそうです。散歩は、やがて朝子さんが車椅子を押すことに。「膝を痛めながら押してね。椅子の取っ手にするように歩いてたこともあったんだよ」。

今は旭川市内の長男（60）が泊まりに来てくれるので一人でも不便はありません。「今が一番幸せだよ。一人で何とかしておれるからね」とようやく訪れた穏やかな日々をかみしめています。

俳句

ぼたん雪鼻に舞い降り空見上げ
まゆ玉に期間限定神宿る
朝日あびかすかに揺れる雪木花
刻冴えて壁の魔除けの浮かびくる
あてもなく樹氷の森をさまよいぬ
冴えし夜や地球のどこかで病みている
一番星さがす瞳に冬冴える
冴ゆる空雪踏む音の響く街
着ぶくれてひとそれぞれに道歩く
冴ゆる夜の遠き旅へと流星群
野天湯の湯気は気まぐれ星冴ゆる
寄鍋の箸はぶつかる夜は更ける
秒針の音の冴えごえ夜の果て
我が町のツルハの看板色冴ゆる
手に触れる冬の星ある港町

山内みゆ
小林ろぼ
杉山ひろのり
保科なほ
徳光吐苦
杉山りつ
こばやし 星来
横田則子
若田久
高瀬潤
石澤清宏
三島智
若田郁
本田咲
佐々木りえ

